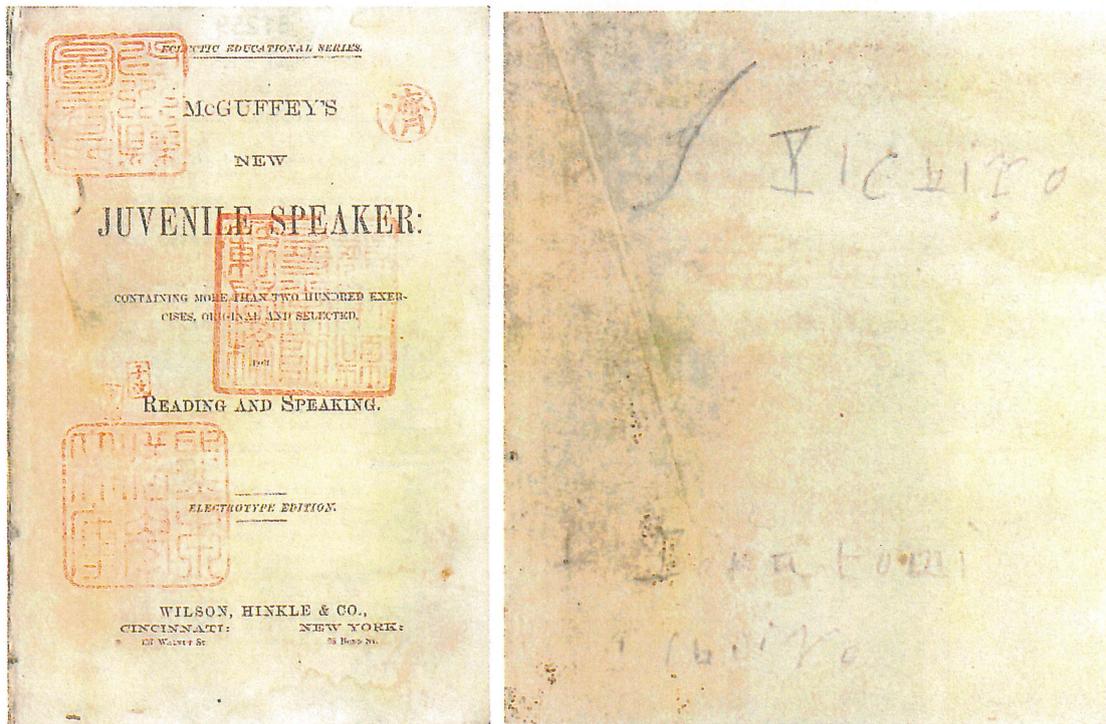


# 蘇峰・蘆花資料展示

(於熊本県立大学図書館、令和2年3月2日～14日)

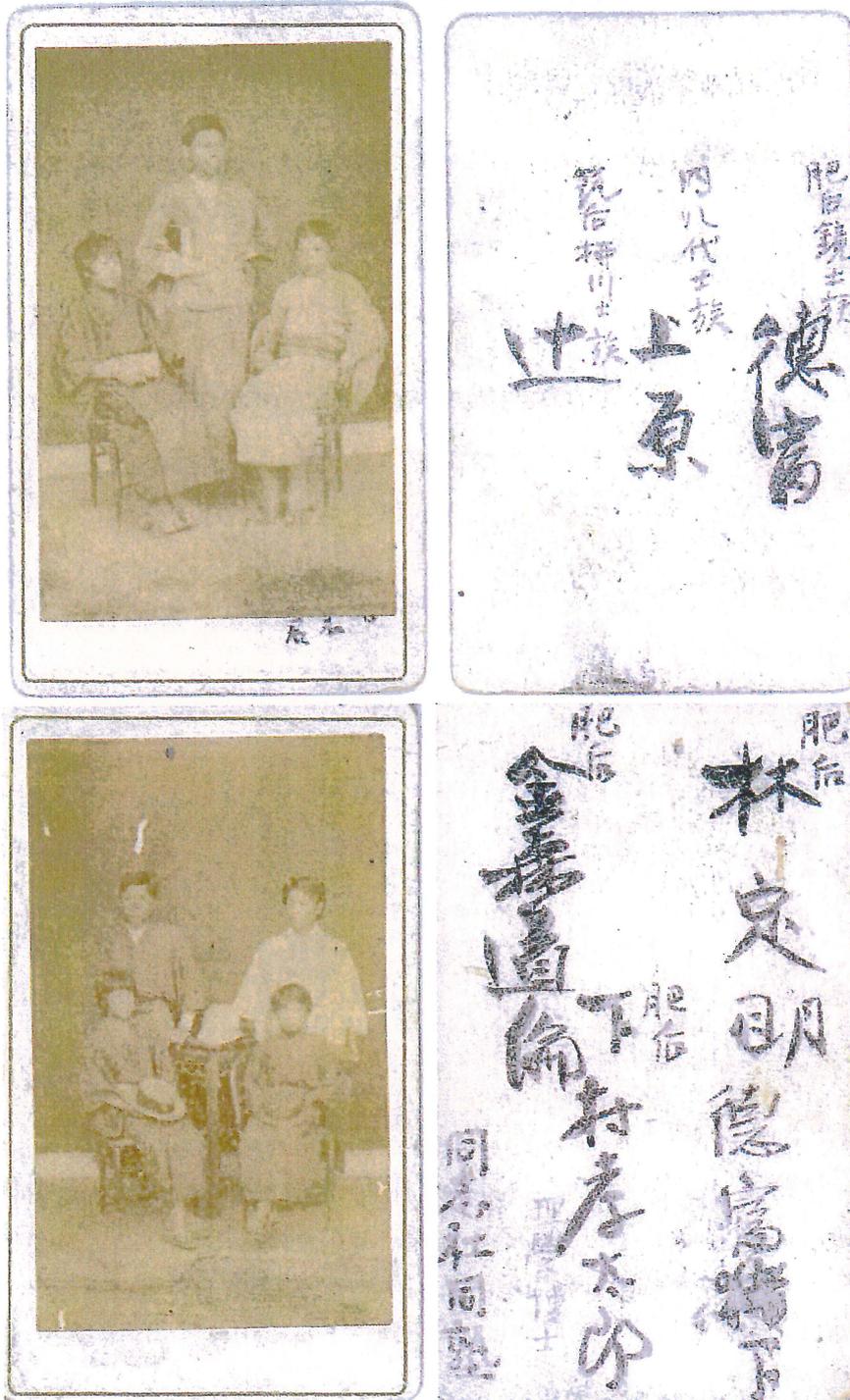
熊本県立大学文学部では「蘇峰・蘆花研究の拠点化」事業を進めており、関連資料の収集につとめてきた。今回の展示は、これまでに入手してきた各種資料を、研究成果および地域還元の一環として披露するものである。

## ① *McGuffey's new juvenile speaker*



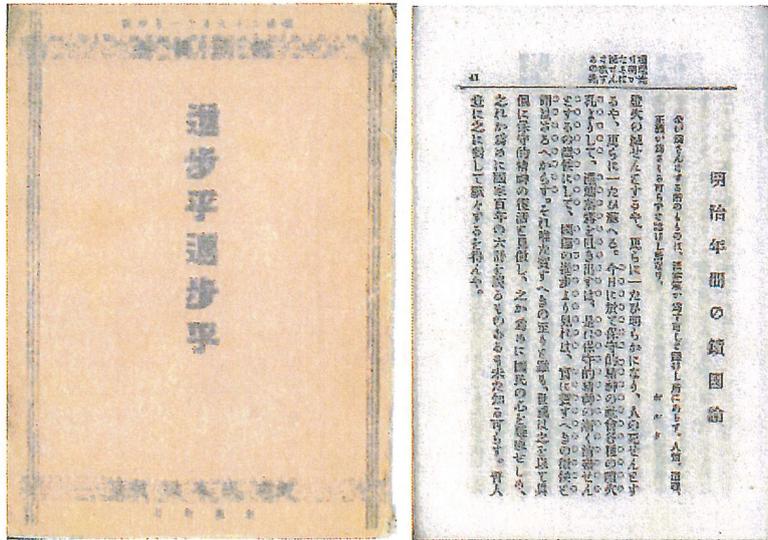
明治4年(1871)9月から同9年8月まで開校した熊本洋学校では、御雇外国人ジェーンズ(Leroy Lansing Janes)による英語直接法による講義が展開された。4年制のカリキュラムの中で、本書は1年生から用いられた入門者向けの英会話教科書である。識語の「T Yichiro」、「I Tokūtomi」は、一度中退し、第五回生として再入学した徳富猪一郎(蘇峰)による。いわば落書きという営為や字の書き方に幼き日の蘇峰の姿が見える。(大島)

②初期同志社バンド古写真



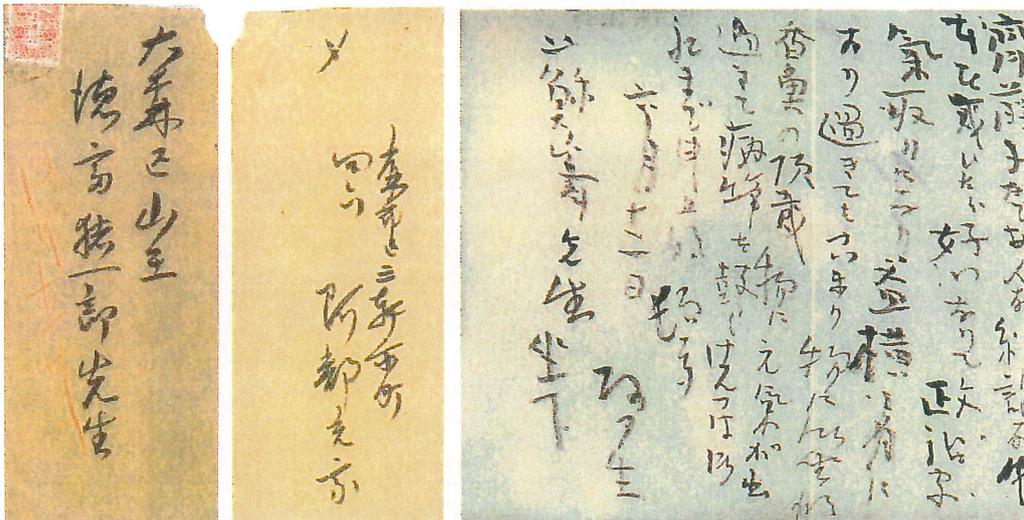
幕末・明治期日本の古写真は、1850年にフランスで発明された鶏卵紙プリントが一般的であった。3人並んだ一葉は、右から「柳川士族 辻」、「八代士族 上原」、そして最左が幼き日の徳富猪一郎（蘇峰）である。4人が映るもう一葉は、右上が金森通倫、左上が林定明、右下が下村孝太郎、そして左下が蘇峰である。その座り方や目線は、後年の姿と重なるものを感じさせる。（大島）

### ③蘇峰「明治年間の鎖国論」



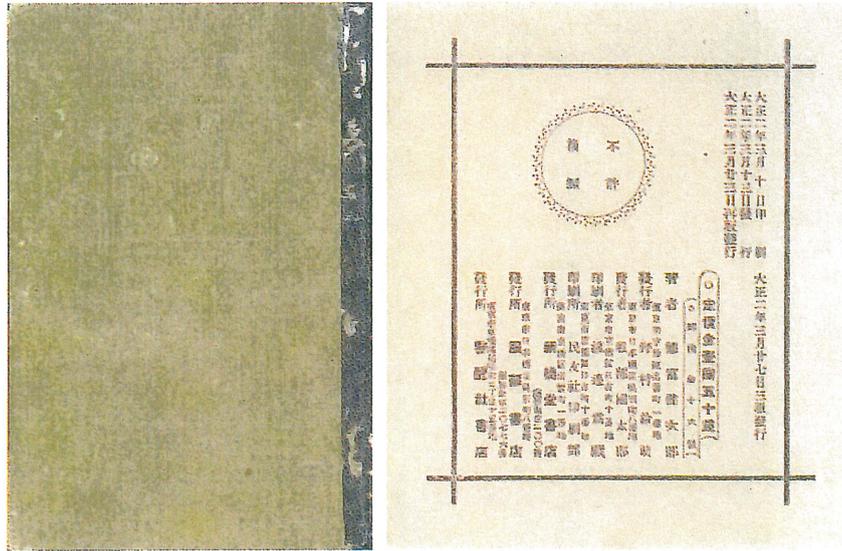
日本の進路を見据えて『国民之友』第44号（1889年3月、のち本書『進歩乎退歩乎』に所収）に発表した徳富蘇峰「明治年間の鎖国論」の論旨は、西洋の知識・文物に対する排除的姿勢の批判であり、そこには外国に対する植民地主義的発想は不在であった。日清戦争前夜に刊行した『吉田松陰』（1893年12月）では大々的に植民地主義が標榜されていることを踏まえると、変節前の発想が窺えて興味深い。（大島）

### ④蘇峰宛阿部充家書簡



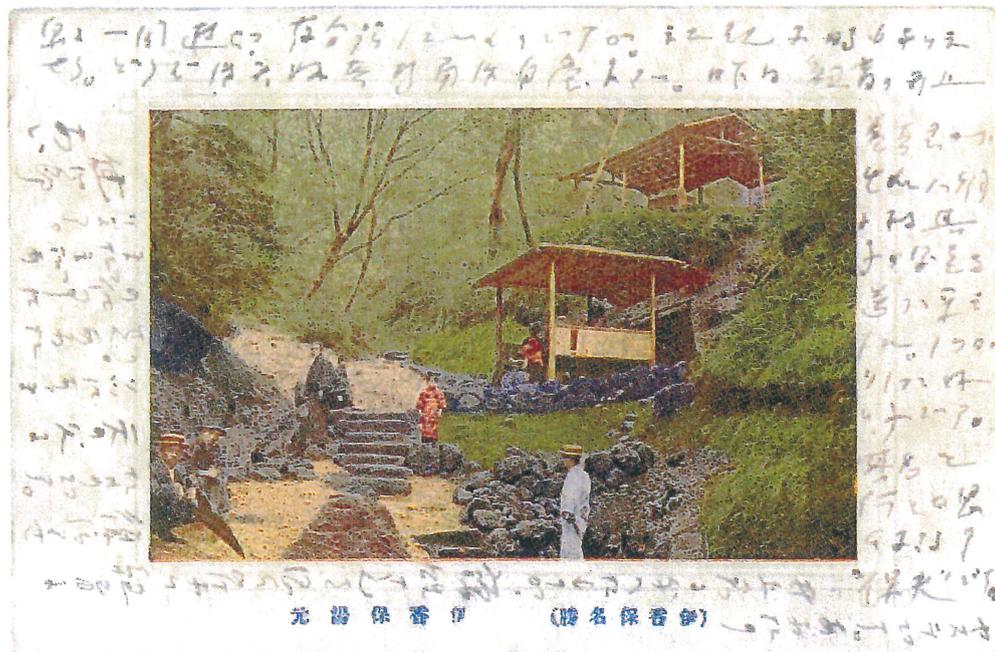
差出の阿部充家は、熊本藩士池辺吉十郎の門下生で、大江義塾教員、民友社社員を経て京城日報社長をつとめた人物で、朝鮮総督に就任した斎藤実の政治顧問となったり、中央朝鮮協会の重職を担ったり、外地朝鮮の統治と深く関わった。個性的な字で記された書簡の内容は、病床にあった充家を見舞ったことに対する返礼である。なお、酸性紙の封書には「阿部直筆」との朱書が認められる。（大島）

⑤ 蘆花『みみずのたはごと』大正2年第3版 警醒社書店他



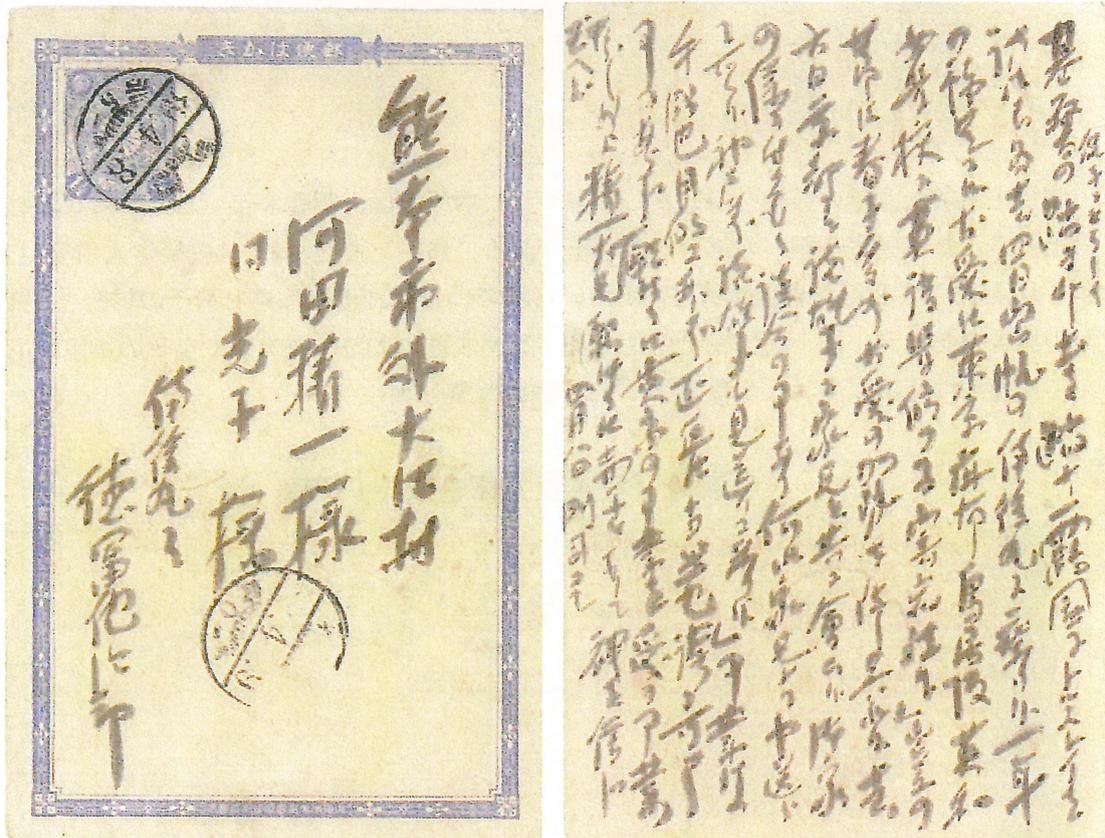
蘆花夫妻が、明治四十年に武蔵野の孤村（現在の世田谷区粕谷）に移り住んでから、田園生活の中でのスケッチ集として執筆した作品。著者自身のことばによれば、「みみずの真似して、土ほじくりする間に、折にふれて吐き出したるたわ言共をかき集めたるもの」。ただし、その内容は、まさしく即興のスケッチ的なものから、これも自身のことばでは「短編小説、瞑想、書翰、紀行」に及ぶ、ジャンルに囚われない執筆活動の産物となっている。なお、正しくは蘆花の号ではなく初めて健次郎の名で発表した著。（鈴木）

⑥ 河田みつ子宛蘆花絵はがき



『書翰十年』（岩波書店）所収。同書により、大正十年五月に、当時は熊本市外であった大江村に住む、姉河田みつ子に伊香保から宛てた絵はがきと知られる。書面中の「大仕事」とは、大正八年から一年二ヶ月にわたる世界一周の旅をさす。これも書面の中に見える「日本から日本へ」は、その世界周遊の旅の克明な記録で、大正十年三月に、金尾文淵堂から「東の巻」「西の巻」の二部構成で出された豪華本。（鈴木）

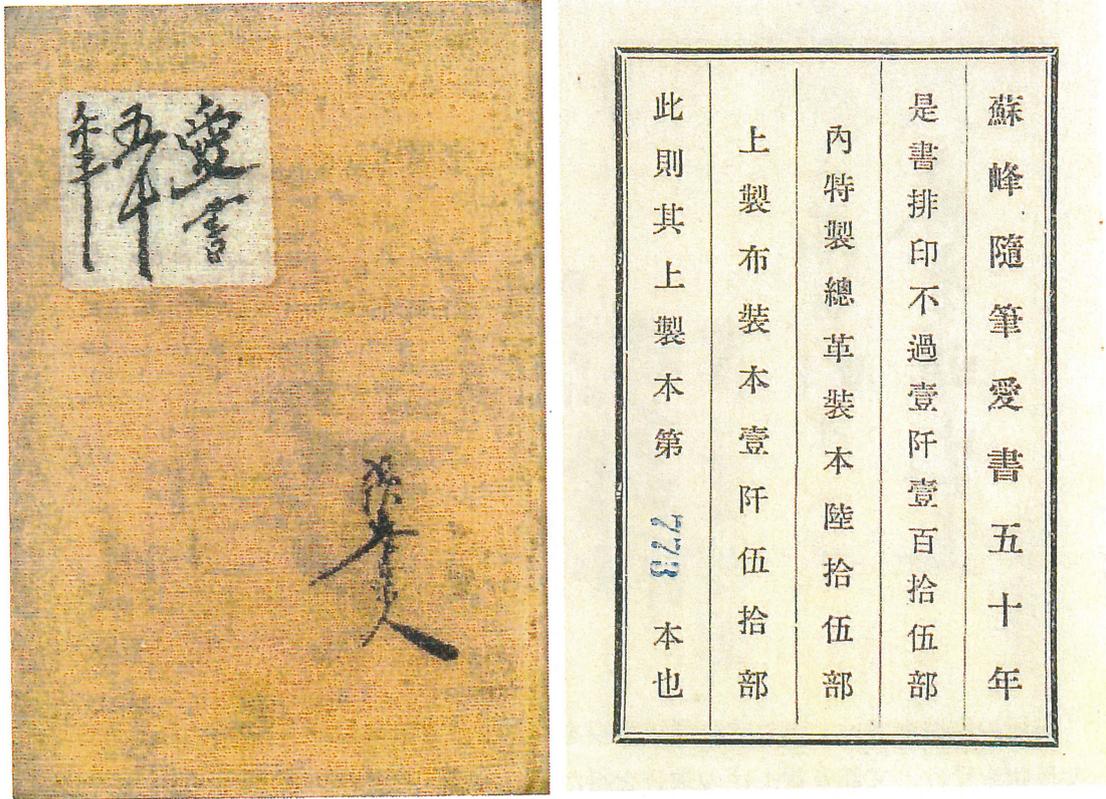
⑦ 蘆花より河田精一・光子宛はがき



消印により明治三十九年の投函と知られる。はがきの文中にあるように、この年蘆花夫妻は、トルストイ訪問を目的とした欧州旅行へ旅立つ。このはがきは旅の途次、備後丸という船の中でしたため、門司で投函したものようである。旅行に備え、愛子夫人は麻布の英和女学校に寄宿して英語学習に励んだというのも微笑ましい。全集、『書翰十年』にも未収録のはがきである。（鈴木）

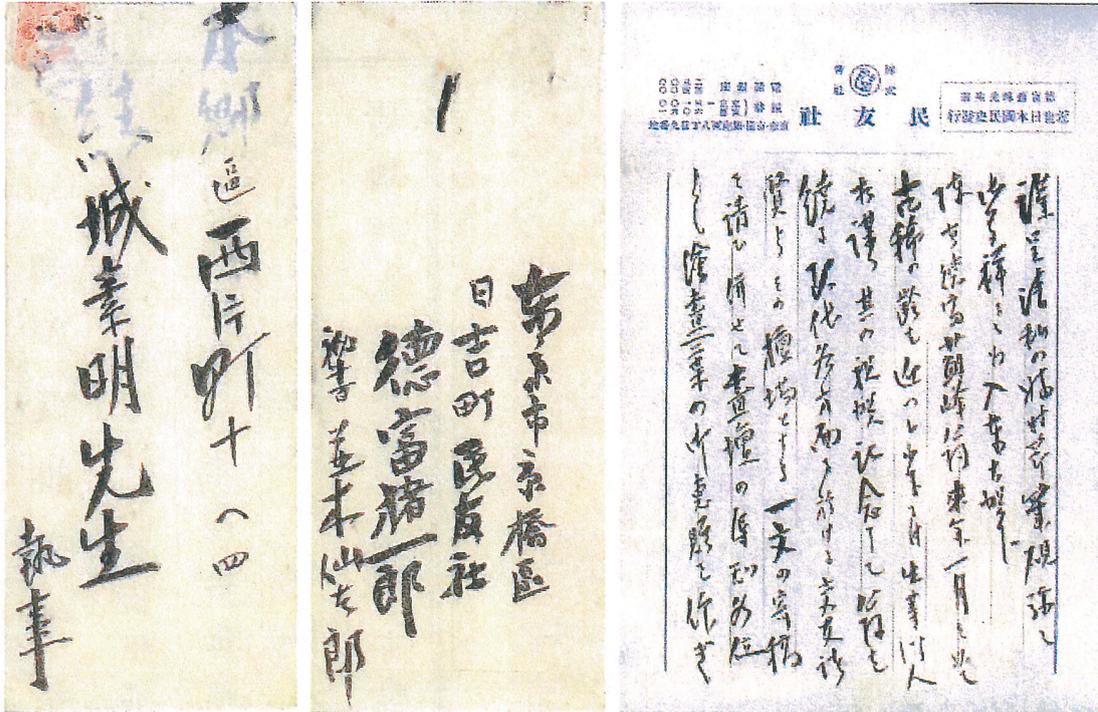


⑩蘇峰『蘇峰愛書五十年』



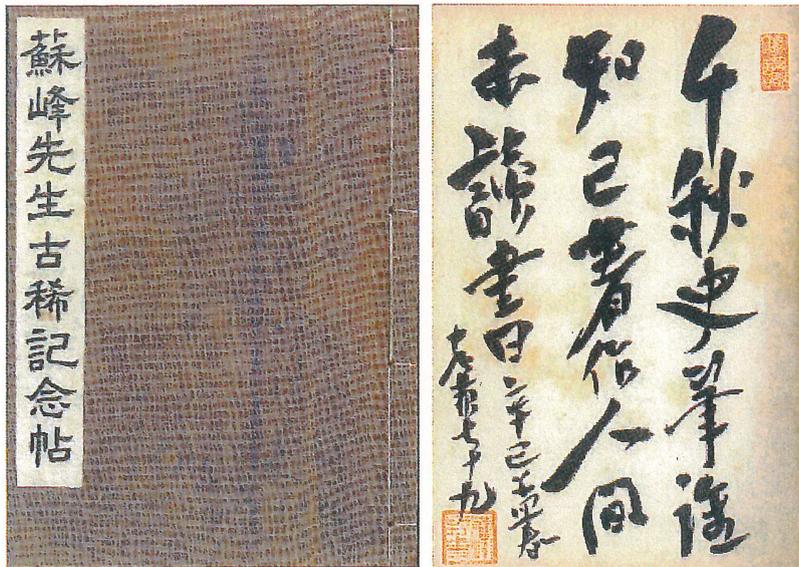
本書冒頭に著者自身が記すように、書物は蘇峰にとって「最愛と云はぬが、最愛の一」であった。愛するだけではこと足りず、古今東西の珍書、希書を収集していたことはよく知られた事実。また度々、贅を尽くし凝った造本で自著を刊行していたことも、今では知る人ぞ知るところ。本書は、蘇峰の愛書趣味の発露として著された書物随想集を、数々の美本装幀で知られる庄司淺水が手がけた造本。本書とは別に、更に豪華な革装の特製版も作られた。(鈴木)

⑪結城素明宛並木仙太郎書簡



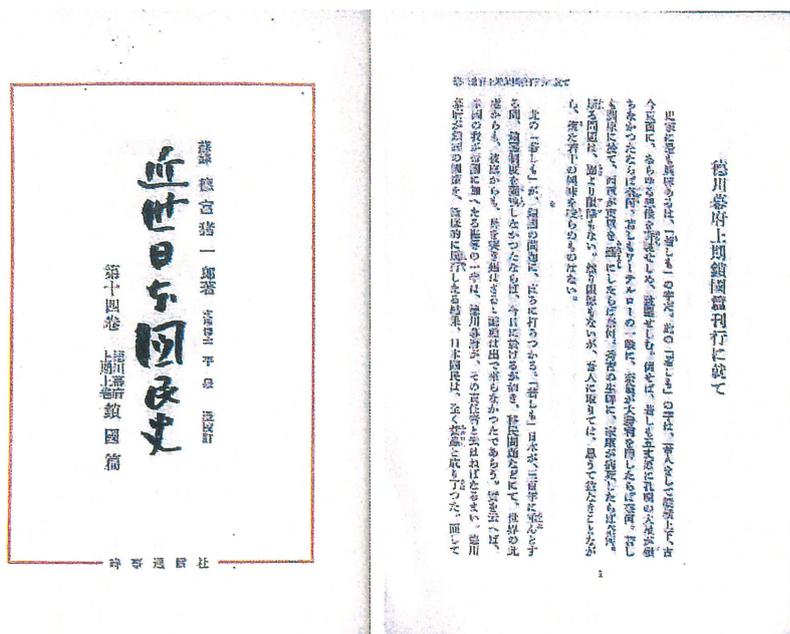
宛所の結城素明は、東京美術学校教授をつとめた日本画家で、代表作「轉」は第5回文展で褒状を受け、文部省買上げの榮譽を得た。その後、フランス政府からもレジオン・ドヌール勲章を受賞する。蘇峰の秘書・並木仙太郎が民友社の用箋に記した本書簡の内容は、翌年の昭和7年に迎える蘇峰の古稀（数え年）に合わせて記念出版を計画しており、そのため結城に対し絵画一葉の揮毫を依頼するものである。（大島）

⑫『蘇峰先生古稀記念帖』



本書は、昭和7年に古稀を迎えた蘇峰のために催された記念展覧会の目録である。蘇峰の揮毫に始まり、徳富および矢嶋家系図を記し、筆蹟、肖像画、書牘、草稿、ポスター、新聞、写真、文具、拓本、印譜など蘇峰が入手した、もしくは蘇峰自身が執筆あるいは関係した資料139点の影印を掲載し、年譜で幕を閉じる。和装（糸による四つ目綴じ、外題題簽）仕立てとしたのは、蘇峰の嗜好に合わせてのことであろう。ただし、冒頭の揮毫の年紀・署名が、本の奥付から九年後の「辛巳孟春／老蘇七十九」であることは不審。（大島）

### ⑬蘇峰『近世日本国民史』



全100巻に及ぶ本書は、徳富蘇峰の該博な知識に基づいて編まれた日本通史であった。史実を追求する歴史学書ではなく、物語的な要素を含む史論であったことで刺激的な表現が可能となり、そのため言論人蘇峰の日本人を煽動する手腕が遺憾なく発揮された。第14巻「鎖国篇」を例にとると、本巻の導入部において、いわゆる「鎖国」政策によって「日本国民は、全く蓑虫と成り了つた。」と読者を挑発し、帝国主義的な発想に駆り立てる。（大島）